

# フィデル・カストロとキューバ革命を考える

—イグナシオ・ラモネ『フィデル・カストロ：みずから語る革命家人生』を読んで



新藤 通 弘

しげのり・みちひろ 1944年生まれ  
フィデル・カストロの現代史家。『フィデル・カストロ』の著者。著書に『現代キューバ経済史』（大村書店）、『革命のくそ大工』（新日本出版社）など。

本書は、邦題は、イグナシオ・ラモネ『フィデル・カストロ：みずから語る革命家人生』（上・下、伊高浩昭訳、岩波書店、2011年）となっている。原題は、キューバ版は、Ignacio Ramonet, *Cien Horas con Fidel: conversaciones con Ignacio Ramonet*, Oficina de Publicaciones del Consejo de Estado, La Habana, 2006（フィデルとイグナシオ・ラモネとの100時間の会話）、スペイン版は、Ignacio Ramonet, *Fidel Castro, Biografía a dos voces*, Debate,

Barcelona, 2006（フィデル・カストロ：二人の対話による伝記）である。それぞれ、出版された国民向けのタイトルとなっている。

## はじめに

キューバでは、本年3月19日、キューバ共産党第6回党大会が終了した。大会は、広範な国民の切実な要求に

沿って、50年続いた経済制度の大きな転換に踏み切った。北の巨人米国の恒常的な圧力や、経済封鎖が続く中で、それらの継続を前提として、国民生活を満足させるべく、市場要素を各所に導入して経済発展をはかろうとするものである。フィデル・カストロのもとで、キューバ経済は、市場要素が大きく制限されていたが、ラウル・カストロ政権のもとでの今回の大会で、いわば「計画」も「市場」もという経済モデルに大きく舵を切り始めたのである。

別な言い方をすれば、この半世紀は、米国との対峙の中で、社会主義体制というよりも、むしろ政治的にも経済的にも、いわば国家総動員体制を維持して、キューバの主権を守ってきた半世紀でもあった。反バスタ独裁政権とのたたかいと、この半世紀の革命の中で、傑出した指導力を発揮してきたのは、フィデル・カストロであることは、だれも否定できないであろう。本書は、スペイン版原題に「フィデル・カストロ：二人の対話による伝記」とあるように、革命の指導者の自伝ともなっている。

本書は、フランスの月刊誌『ルモンド・ディプロマティック』の編集長である、左翼的な知識人イグナシオ・ラモ

ネとの100時間余にわたるインタビューである。インタビューは、2003年1月から2005年末まで3年にわたり数回行われた。カストロ前議長は、これまで多くのインタビューを外国人記者・知識人と行ってきた。その主なものには、ブラジルの解放の神学のフレイ・ベットー神父との対話『フィデルと宗教』、イタリアの新聞記者、ジアンニ・ミナーとの対話『フィデル会見記』、『フィデル危機における思想の現在と未来』、ニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線の指導者、トマス・ホルヘとの対話『一粒のトウモロコシ』がある。しかし、本書は、そのテーマの多様さと分量において白眉といえよう。本稿は、フィデル・カストロとキューバ革命を全面的に論じるものではないが、本書でフィデルが展開する重要な諸点について、可能な限りコメントしたい。

## 本書の構成

本書の構成は、次頁の表のようになっている。

表に見られるように、スペイン版は28章に分けられているが、しかし、キューバ版の最終版第3版では、26章立てになっている。これは、フランスの読者を対象とし

章	スペイン版、翻訳書	キューバ版
はじめに	フィデルとの100時間	フィデルとの100時間
1	ある指導者の幼少時代	革命の来歴
2	ある区選者の鍛冶	ある指導者の幼少時代
3	政治への参加	ある区選者の鍛冶
4	モンカダ兵營襲撃	政治への参加
5	革命の来歴	モンカダ兵營襲撃
6	「歴史は私に無罪を証明するた るら」	「歴史は私に無罪を証明するた るら」
7	チェ・ゲバラ	チェ・ゲバラ
8	マエストラ山脈で	マエストラ山脈で
9	ゲリラの教訓	ゲリラの教訓
10	革命初期の過程と問題	革命初期の過程と問題
11	陰謀の始まり	陰謀の始まり
12	ヒロン・洪博攻撃事件	ヒロン・洪博攻撃事件
13	1962年10月危機	1962年10月危機
14	チェ・ゲバラの死	チェ・ゲバラの死
15	キューバとアフリカ	キューバとアフリカ
16	列米移住問題の危機	列米移住問題の危機
17	ソ連の崩壊	ソ連の崩壊
18	ホチヨア事件と死刑	ホチヨア事件と死刑
19	キューバと新自由主義グローバ リゼーション	キューバと新自由主義グローバ リゼーション
20	シエラ・カスター米大統領 の采訪	シエラ・カスター米大統領 の采訪
21	2003年3月の反体制派逮捕	2003年3月の反体制派逮捕
22	2003年4月の乗っ取り事件	2003年4月の乗っ取り事件
23	キューバとスペイン	キューバとスペイン
24	フィデルとラテン	ラテンアメリカ
25	今日のキューバ	今日のキューバ
26	今日のキューバ	フィデル後はどうなるのか
27	人生と革命の決算	年表
28	フィデル後はどうなるのか	
	年表	

5頁)が発行された。ほぼ同じく同年5月キューバ版初版(26章718頁)も発行された。しかし、フィデルは、内容に慎重を期したいと考え、またラテンアメリカの新しい状況も加筆したいと考えて、同年6月から加筆・修正の作業にかかった。ところが、同年7月27日、フィデルは腸を手術し、31日、国と政府の諸権限を一時的にラウル・カストロ副議長らに委譲した。しかし、その後も、病床で加筆・点検作業を続けた。その結果を反映して、同年9月、キューバ版第2版(26章798頁)が発行された。「ラテンアメリカ」の章が、大幅に加筆・修正され、その他の加筆・修正と合せて、初版より80頁増加した。

しかし、その後も、フィデルは、さらに点検・修正作業を続け、フランス語版のために行われたテーマ「フィデルとフランス」を挿入して、同年11月、キューバ版第3版(26章、813頁、15ページ増)が発行された。そして、10か月後の翌年の2007年9月、スペイン版第2版が発行された。これは、キューバ版第3版と内容はまったく同じものであるが、「フィデルとフランス」、「人生と革命」の2章を新たに章立てして、全部で28章となっている。

このように短期間に病床の中でも加筆・修正を繰り返

たスペイン版との違いで、訳書の第24章「フィデルとフランス」、第27章「人生と革命の決算」ともキューバ版にももらさず収録されている。筆者は、スペイン版(第2版まで刊行)は、第一版のみ参照したが、1章―5章の章立ては、キューバ版通りであり、スペイン版第2版も同じ章立てだとすると、原本の構成に忠実であるべき訳書でなぜ、原本の第1章「革命の来歴」を第5章にもつてきたか、理解しかなるところである。

### 本書刊行の経緯

本書の企画は、2002年2月、ラモネがフィデル側にインタビューを申請したところから始まった。申請からはほぼ1年後の2003年1月、インタビューが開始され、インタビューは教度に及んだ。最初の草稿が出来上がったのが、2003年5月で、その後2004年秋、補足的な質問のためのインタビューを経て、2005年末、最後の長時間のインタビューを経て、原稿が完成した。フィデルとのインタビューがこれほどの時間、100時間を費やして行われた例は他にない。

原書は、まず2006年4月スペイン版初版(26章65

して2版も改訂したところにフィデルの意気込みがうかがわれる。1927年生まれ、フィデルは、近年キューバ作家に協力して、父親の伝記、自らの幼少年時代の伝記が発行されている。また昨年は、シエラマエストラ山脈における1958年後半のゲリラ戦最後の勝利の過程の回顧録を書いている。そして、この回想録も、加筆・訂正して本年6月改訂版が出版された。また、今後は恐らくは、ミサイル危機の過程の執筆を示唆している。本書は、フィデル自身のこうした一連の自伝的出版計画の一端とみることができよう。

### 本書のあらまし

本訳書は、スペイン版第2版の翻訳で、第1章から第3章まで、フィデルの幼少年期から社会の不正に目覚めて、汚職・腐敗を糾弾するキューバ革命党(オルトドクス)に入党し、バチスタ独裁に対して立ち上がるまでを描いている。

引き続き、フィデルは、バチスタ政権の打倒を目指したモンカダ兵營襲撃を組織するも失敗し(第4章)、釈放後7・26運動を設立、メキシコに亡命し、同志とともに

キューバ侵攻の準備をする(第5、6章)。その過程でアルゼンチン出身の医師ゲバラと会い(第7章)、1956年12月ヨット「グランマ号」で82名の青年がキューバに侵入するも、バチスタ軍の反撃にあい、生き残った少数の同志が、シエラマエストラ山脈で農村と都市の支援を受けながらゲリラ戦を展開し、1959年1月革命に勝利する(第8章、9章)までを述べる。

第10章からは、バチスタ打倒を達成後、米国からの干渉を受け(第10章、11章)、1961年には米国に支援された亡命キューバ人達が、南部のヒロン海岸に侵攻するも、それを撃退(第12章)。米国との対決は、結局1962年10月ミサイル危機で頂点に達する(第13章)。

その後、ゲバラは、革命運動参加当初の希望通り、アルゼンチンでの革命運動を展開するため、キューバを去り、コンゴ、ボリビアでゲリラ戦を行うも、条件がなく敗北し、結局死亡する(第14章)。70年代に入ると、キューバは、アフリカに積極的に関与するようになり(第15章)、その過程の中で、アンゴラ派遣軍の指揮官、オチョア将軍の麻薬・汚職問題が発生、関係者を死刑に処す(第18章)。

80年代初頭、国内経済が困難になる中で、米国への大

量出国問題が発生する(第16章)。やがて90年初頭、ソ連が混乱し、崩壊、キューバ経済は困難を極める。一方、ラテンアメリカでは、80年代半ばから90年代にかけて、新自由主義グローバリゼーションがキューバを除き各国で適用され、諸国民は辛酸をなめることになる。経済発展至上主義の新自由主義の結果、環境問題が深刻となる(第19章)。

カーター元大統領が2000年にキューバを訪問、米国の干渉政策と呼応した国内の反体制の動きについて述べる(第20章)。2001年に発足したブッシュ政権が、2002年後半より反体制派への支援を強めた結果、2003年3月キューバ政府は、反体制派72人を逮捕する(第21章)。また、一方で、ブッシュ政権のハイジャック事件での非協力的態度から、同年4月ハイジャック事件が続発し、首謀者を死刑に処す(第22章)。

第23章では、かつての宗主国スペインの歴代の政治指導者の評価を、第24章では、フランスの政治指導者、文化人の評価を展開する。ラテンアメリカでは、新自由主義政策による悲惨な結果がもたらされ、今世紀にはいり、左翼政権が続出している。第25章でその指導者たちについて語る。今世紀に入ったキューバについては、

ヨーロッパ諸国で人権、民主主義が問題とされるようになった。第26章で、それらの問題についてのフィデルの考えを展開する。

第27章では、自らの習慣、革命50年の成果と世界のいろいろな指導者についての印象を述べる。そして終章第28章では、革命50年を経過したキューバ社会の困難、格差の拡大、腐敗、社会主義への確信、一党制の弁護、後継者問題について持論を展開する。

## 本書についての筆者のコメント

このように50年にわたるキューバ革命史の重要なテーマを一応はばもれなく網羅しており、最高指導者の回顧という点では、第一級の史料といえよう。しかし、あらゆる回顧録、自伝、日記などが示しているように、この種の史料は、自らの考えを一面的に述べたり、立場を弁護したり、敢えて自己の役割を強調したり、あるいは都合から敢えて触れない事実もある。これは、史料批判の常識であり、本書も例外ではない。つまり、あくまでフィデル・カストロという人物の立場からみたキューバ革命の回顧である。キューバ革命史の客観的な再構成に

は、一定の時期を経た文書の公開なども必要であろうし、様々な客観的な史料、立場が違う人びとの見解も考慮しなければならないであろう。

なお、筆者が、フィデルの回想に疑問を感じている点を、差し当たって以下の重要な点にしばって述べてみたい。

まずは、ボリビアでのゲバラ及びキューバ人のゲリラ戦への支援のような60年代のラテンアメリカへの革命の輸出についてである。ここでは、各国の革命運動の自決権の尊重という観点が何れもない(上332・337頁)。ボリビアに関しては、フィデルが、モンヘ、コージェ、レチンなどの当時のボリビアの指導者をキューバに呼び寄せ、かなり綿密に介入していたことが、反省なく語られている(上344・345頁)。

次に一党制の問題である。現在のキューバの共産党一党制は、1890年代のホセ・マルティなどが創設したキューバ革命党と同じく、多くの国民が参加する民主的な制度であるとフィデルは主張する(下331頁)。しかし、キューバ革命党は、スペインとの独立闘争を遂行するために、各政党の組織を維持しながら、キューバ革命党に参加する「統一戦線党」である。内容も歴史的條件

も同じではないのである。

確かに、バチスタ政権下の政党は、キューバ共和国、自由党、民主党、真正党（アウテンティコ）及び正統党（オルトドクソ）も国民の支持を得ず、革命勝利後は、自然に雲散霧消した。そして、革命を推進した、7・26運動、人民社会党（共産党）、革命幹部団が、61年から統合の過程に入り、1965年に第二次キューバ共産党が設立され、一党のみが存在するようになったという歴史的経過がある。しかし、歴史的に一党制が成立したということと、法律で一党制を制度として規定することは別問題であるはずである。

しかも、現在のキューバでは、すでに多様な所有形態が生じており、今後も多様な生産形態を推進して、現在の経済危機を乗り越えようとしている。このことは、それぞれの経済的基盤を反映する政治的組織が客観的には要求されるということではないであろうか。また、キューバ共産党が社会の最高指導勢力と規定する憲法（第5条）も、歴史の審判には耐えられないと思われる。

さらに、国際主義の問題がある。キューバは、国際主義という名前で、60年代からラテンアメリカに、また60年代半ばから、特に70・80年代に、アフリカに40万人の

プロレタリア国際主義は、共通の国際的課題を「各国で」追求することが基本なのである。ベトナム人民支援の国際主義、国際連帯は、ベトナムに人びとを派遣して、侵略軍のアメリカ軍とたたかうという形ではなく、日本の中で米軍のベトナム出撃反対、日本政府の米国のベトナム戦争政策への支持・加担に反対するたたかいとして行われたのであった。

また、死刑制度に対する首尾一貫しない考え（下53頁）、現代の経済学に対する単純な考え方（下64頁）、レーニンのNEPに対する否定的見方（下65頁）、反体制派と民主主義、人権問題、政治囚の問題、表現・報道の自由、社会主義の不可逆性についての憲法への挿入・改訂、チェコ事件⇨社会主義共同体の利益の擁護（下300頁）なども、私は、意見を異にするものである。

特に、これらの経済問題に関する言及の中で、フィデルは、キューバ社会が、資本主義から社会主義（共産主義の低い段階）への過渡期にあるという認識を述べていない（64・65頁）。この認識は、1975年に制定されたキューバ共産党の綱領（綱領は85年に改訂後、91年の党大会で廃止された）では明確に指摘された見地である。この見地を忘れると、現在の社会主義建設期⇨過渡期に

キューバ兵を派遣した。また、80年代には、中米諸国にキューバ人軍事顧問団を数百人派遣した。さらに、特に90年代以降、医師、教師、識字運動専門家が発展途上国に派遣されている。これらをフィデルは、すべて国際主義に基づいた活動と述べている。つまり、フィデルのいう国際主義は、「外国」で「民族解放」、「社会革命」の「使命」に従事することが国際主義である（下308頁）。そこには、キューバ独自の革命観が外国で推進される。間違った場合にはキューバの政策の押し付けとなったり、大国主義となったりする論理を孕んではいないであろうか。

しかし、もともと「プロレタリア国際主義は、資本主義・帝国主義の陣営が国際的に提携、協力して、その支配を維持・強化しようとしているのに対抗して、全世界の労働者階級が共通の立場を認識し、連帯してたたかう立場・思想をいう。……今日、真のプロレタリア国際主義とは、こうした覇権主義・干渉主義を許さずそれぞれの国の労働者階級が自国の革命に自主的に責任をおり、その闘争をおしすすめて、共通の課題で世界の労働者階級と連帯することをいう」（社会科学辞典編集委員会編『社会科学総合辞典』（新日本出版社、1992年）。つまり、プ

おける市場の役割について、市場を否定的に見て、大変窮屈な議論となってしまう。フィデルの市場論は、本書でもまとまった形では展開されていないが、第5回党大会（1997年）の閉会演説にも見られるように、否定的側面を強調する傾向があり、実際その後の経済政策に現れているところである。

現在、ラウル政権が取り組んでいる改革の対象は、フィデル執政時代の、誤り、歪みである（下321・330頁）。ラウルは、改革しなければならない論拠として、多くの場合、そうした個々の誤り、歪みを指摘したフィデルの過去の演説などを引用している。しかし、それでは、なぜフィデルの執政時代にその改革が行われなかったのであろうかという疑問が湧く。私が聞いたキューバの友人研究者たちは、いずれも、理由がわからないという。ここに、フィデル・カストロという人物を理解する重要なカギがあるように思われる。「キューバを説明すれば、フィデルが政府首班であると同時に、反対派のリーダーでもあるということだ」という、コロンビア人、ノーベル文学賞受賞作家のガブリエル・ガルシア・マルケスの言葉も、この文脈の中で、良く理解されるであろう。

このように見てくると、キューバは、アメリカ帝国主義と対峙する中で、キューバの主権を守るため総動員体制を敷かざるをえなかった。その総動員体制の要素の中には、社会主義の諸要素とも共通する点もある。しかし、それらが峻別されることなく、ある場合には混同されて、独自の政治・経済体制となっている点も少なくない。革命50年を経過した現在から、革命を振り返って見ると、キューバ革命は、北の巨人の鼻先で、真の独立を達成し、民族主権を確立したこと、教育、医療面で一定の社会改革を達成した革命であった。しかし、革命期間中は、ずっと米国との戦争状態にあり(下303頁)、あまりにも厳しい米国の恒常的干渉と対決するためには、政治的にも、経済的にも、軍事的にも総動員体制を長期にわたり維持せざるをえなかった。そのことが、現在、政治、経済、社会の全面にわたり複雑な歪曲した状況をもたらしているのである。今後、社会秩序を維持しながら、まずは経済改革を達成し、国民の生活水準を向上させる中で、政治改革も当然解決すべき課題となってくるであろう。50年経った今、そうしたキューバ革命の独自の諸側面を一つずつ綿密に、客観的に検討する必要があるように私には思われる。

## 訳文について

訳文は、おおむね堅実であり、長文の原書を翻訳された訳者の労苦を多としたい。ただ、専門用語などにおいて若干原意からはずれたものが散見される。また、訳者独自の訳語が与えられている場合もある。よく出てくる訳語「大学予科」は、キューバの学校制度では、やはり「高等学校」であろうし、「協同農場」は、単に協同作業ではなく、土地の所有権にも関わるので「協同組合農場」であろう。また、何度か出てくる、現内務相アベラルド・コロメの俗称の読み方は、訳語の「フリー」でなく、「フリー」である。しかし、これらは、本書の訳文の価値を落とすものではない。なお、巻末に、関連年表が掲載されているが、訳者は、親切心から、原書の年表に訳者独自の判断で事件を追加しており、間違った年号も見られる。しかし、年表は、作成者の一定の歴史観を反映したものであるので、そのことにより、明確な歴史の展開が分かりにくくなっているのは残念である。